

瀧仰宗の盛衰(四)

石井修道

目次

一 はじめに	
二 仰山慧寂	(以上一八・一九号)
三 仰山西塔光穆	
四 晋州霍山景通	
五 杭州文喜	
六 五冠山順之	
(1) 五冠山瑞雲寺の開創	(1) (9)
(2) 四対八相	(10) (15)
(3) 両対四相	(16) (20)
(4) 四対五相	(21)
(5) 三遍成仏	(22) (29)
(6) 三篇証實際	(30) (42)
(7) 遷化・諡号	(43)

(8) 西来意とは何か	(以上第二十号)
(9) 以字でも八字でもない字とは	(44) (45)
(10) 五花円相とは何か	(47)
七 仰山南塔光涌	
(1) 宋齐邱撰「仰山光涌長老塔銘」	
(2) 何が文殊の師か	
(3) 何が見事な働きを示した言葉か	
(4) 真仏はどこに住んでいるか	
八 仰山東塔和尚	
(1) 何が君王の剣か	
(2) 法王と君王の出会いとは	
九 洪州観音常鐺	
十 福州東禅慧茂	
十一 福州明月山道崇	

三 処州遂昌

三 忠州月巖山月光寺大通

(1) 忠州月光寺円朗禪師大宝禪光塔碑

(8) 西来意とは何か (以下、『景德伝燈録』卷一二の五観山順支章)

新羅五観山順支、本国号了悟大師。僧問、如何是西来意。師
豎拈子。僧曰、莫遮箇便是。師放下拈子。

新羅の五観山順支⁽⁴⁴⁾、本国は了悟大師と号す。僧問う、「如
何なるか是れ西来の意⁽⁴⁵⁾」。師、拈子を豎^たつ。僧曰く、「遮箇
は便ち是なること莫しや」。師、拈子を放下す。

(9) 以字でも八字でもない字とは

問、以字不成、八字不是、是什麼字。師作円相示之。

問う、「以の字も成らず、八の字も是ならず⁽⁴⁶⁾。是れ什麼の
字」。師、円相を作りて之を示す。

(10) 五花円相とは何か

有僧於師前、作五花円相。師画破別作一円相。

有る僧、師の前において五花円相⁽⁴⁷⁾を作る。師、画き破り
て別に一円相を作る。

(1) 五冠山瑞雲寺和尚 忠南大学の鄭性本博士より黄寿永編著『韓国金石遺文』(一九七六年四月、一志社、ソウル)の中に「高麗了悟和尚碑」が収録されていることと、またそのハングル文字の説明を教えていただいた。記して感謝申し上げたい。ただ朝鮮仏教史の研究は、私自身にとって今後の研究課題であるので、鄭博士のご親切にもかかわらず、全く不十分な成果しかここでは発表できないでいる。将来において補正したい。その著の註記によると「国立博物館所蔵(景福宮廻廊に陳列)。高さ一六二cm、幅九八cm、厚き二・五cm。井間があり字径約二cm。元来、京畿道開豊郡嶺南面伴程里坪村洞の一廢寺にて搬出されたという。曾つてこの寺址にて高さ五尺三寸の鉄仏坐像一軀が搬出されたことがあつて(開城博物館陳列)、寂照寺址と推定されたことがあるが、この、断碑の発見によって或は瑞雲寺(五冠山龍岩寺)ではないかという見解もある。この碑片の調査は、任昌淳氏の厚意によってなされた。年代は後記の如く

清泰四年（高麗太祖二十年、西紀九三七）と推定される」とある。なお、『東国輿地勝覽』卷二一の「長湍都護府」の条では、「五冠山は府西三十里に在り。山頂に五つの小峯有り、団円なること冠の如し、因りて名づく」とある。但しこの碑文は欠字が多くあつて読解不能の所も多いが、『祖堂集』の伝記の記述と密接な関係をもつ貴重な資料なので、可能な限り句読点を付して再録することにした。――線は『祖堂集』と同文字、異なる文字は右側に示す。）

□：□不可須有而不有□：□之兵者□□□和尚、諱順之。俗姓朴氏、浪江人也。祖考並□：□遺慶在□。□：□如□、今又徵焉。及乎竹馬之期、漸有牛車□□□為□□□表□□□年十歲、□□□：□登弱冠、道牙早熟。默処官華之地、長逝靜點□：□侶。志不可□：□護鵝。因遊公岳山、忍遇^忽神人邀請、化成宮闕、□：□上國、隨入朝使、利涉雲溟、乘一葉之舟過方□：□何晚。既有所志、任汝住留。□□□大師上□：□伝於我師。師資相承、綿綿不絶矣。禪師不□：□釈尊之前。彼中禪僧、皆增歎伏。忽一日□：□滞在万劫。悟者覺在刹那、見在汝心。不□吾說重□：□鯨擊指路、鼈峰却到故園、大開禪教□宝月朗慈燈□：□元昌王后、及子威武大王、施□冠□□□寺。便住居焉。寺即海内名区□中□：□符中、欲□寺宇□地避隘去旧基一里、別卜吉祥之□治□丘隴□：□。景文大王、頻降□□□御書恭申瞻仰□：□獻康大王、親承法化、長奉尊嚴摩登、入洛之年、僧會遊吳之曰、語其遭遇、彼美多慙矣□：□煥与日月以争輝、荷載□□□恩光古今難足、忽於中和歲、伝聞□□□先大□遷化□：□斎。仍遣門人齋持金玉助□□□法恩也。景福二年（八九三）三月、応□：□教赴京对揚□□□金□：□君王仰敬、士庶歎忻、謂□：□仏日之再中謂優曇□□□洋□：□滅。享年六十五、僧臘四□：□心神鑒肇白寬素果、又□：□法大德俊空故俱□：□前王道逾軒后德□：□進状先師久居国□大□：□今上德侔舜禹、恩洽軋坤、尊奉釈□：□山河而永久、輒課蕪詞、敢作銘云、超哉大士、頓悟玄門。如燈破暗、似月開昏。多生勝□：□濟人寰、倏尔化終、悠然長往、世界悲涼。□：□臣惻愴、高山已頹、吾将安仰、雀□：□之天壤□：□引駕賜紫大德帝釈院釈□：□

つづいて清泰四年八月十七日に記された後記がある。この碑銘を『祖堂集』の編者が参照したことは確実であり、『祖堂集』の編成において重要な意味をもつ資料となろう。中和中の遷化とは、おそらく中和三年（八八三）二月一三日に示寂した順之の先師の仰山慧寂を指すものと思われ、中朝の交通のきわめて頻繁な様子が知られるのである。最近、柳田聖山教授は、『祖堂集』（大乘仏典へ中国・日本篇）所収、一九九〇年六月三〇日）の解説の中で、招慶省僧撰『泉州千仏新著諸祖師頌』および淨修禪師省僧の『祖堂集』の讃頌を手がかりに旧草の祖本の成立過程を推測し、大きな問題提起をされる。ここに五冠山順之の碑の出現は、新草の成立の解明に大事な資料となろう。現段階では解説不可能も多いが、貴重な資料なので「後記」もここにかけおきたい。

国主大王重修□□故了悟和尚碑銘後記。

如龍県制置使元輔檢校尚書左僕射兼御史大

滄仰宗の盛衰（石井）

蓋聞周室臨軒克奉嚴師之道、漢朝革命勤修尊祖之風。由是自縮丕囟高懸、宝曆□□之。伏惟、大王殿下、日□呈祥龍顏演慶、懷濟世安民之妙略、蘊存亡繼絕之英謀、故得福地、□□北闕居尊東溟御極。於是外域申歸□□王之貢□□中華獻賀□□聖之儀。遂使□□赴塗山之會、三千列國、共尋踐土之盟。所以□□鼇岫遺殃、馬津問罪、恭行□□天□□□棄甲披束手以牽羊。是以高仗靈威暫勞□□神用先銷元惡似魏皇滅蜀之時、一□□□以五流有宅百度惟貞此皆□□祖妣宿植善因。□□先君生儲陰德、慈流□□遺裔福被後昆。於是嘗誦吳書、夙窺□□元三世米居皇帝之尊。以此自□□祖考尊靈、無於□□高廟謹依諡法俱似加□□威武大王、命世雄才凌雲逸氣、蓄憂國志家之志、堆帛民伐罪之懷。加以肅設仁祠□□□先和向、道冠楞伽、名高華夏。新佩仰山之印、迴揚迦葉之宗。泊乎廻棹天池、担簦曰□□□聖考大王、遙候□□慈軒、遽趨道左。傾蓋而情同入室、掇齋而礼甚迎門。是則□□□廬。伏以元昌王后、請住五冠龍巖、永為禪那別館。是以便停宝蓋、尋駐禪林、豈管境堅鯨波讓□□□典王之嶺郡賢畢集、衆彥咸臻。豈謂浪水興兵遼陽動旅英雄鼎立郡邑盤和尚難□□□保雲泉便遵塵路、幾經虎窟、獲抵雞林、旋屬三歲、食貧四郊、多畀肯謀駐足海之居夷□□□憐滿座。無何忽因覆疾、以及大期。于時紺馬騰空、白虹貫日。門下以茲失□□多是入唐、少於歸本。雖靈櫬已、還於旧址。而法堂久掩於玄闕、幸遇電□□。有上足弟子令光禪師。常護頂珠、早伝心印。想慈顏而歎恨、思法乳而□□。聞於宸鑑、仍命惠雲上人云虔札是碑、不項牢讓。切以恭承睿旨、敬以□□。諳鈞國王、師之化歟、祛鉄鏢、感降魔。仏道之威、至乎資子及孫、化家徒□□。師伯之恩、此碑製、自辰韓曾題國諱、昨因奉詔、須補追尊、合遵周□□。裏咸依軌轍、並著簡編。今則日月重明、乾坤再造。到処則万民安樂。所居則九穀□□。吐鳳昔歲而杏園、攀桂、玆辰而花梟駐蓬、一昨叨奉綸言、謬裁記事。所冀備□□。慕之情則必永挂枳門、以光僧史謹記。

清泰四年八月十七日記。院主曾玄、及典座僧朗虚、維那僧□□。

この「後記」により、順之の弟子として令光、曾玄、朗虚の名が知られる。

(2) 浪江 朝鮮平安道の大同江。

(3) 昭氏 此の記事の外は不明。

(4) 凌雲 不詳。後記に見える記事も関係あるか。

(5) 俗離山 忠清北道報恩郡にあり、法住寺が現存す。鎌田茂雄『朝鮮仏教の寺と歴史』(大法輪閣、一九八〇年一〇月)五八頁。

(6) 公岳 五岳の一つで慶尚南道八公山にある中嶽(岳)、つまり公山あるいは文岳とも言われる所をさすか。金庾信が中嶽の石室に籠もったことがある。鎌田茂雄『新羅仏教史序説』(東京大学東洋文化研究所、一九八八年二月)九三頁。

(7) 利涉雲浜 浜は溟の誤り。『高麗了悟和尚碑』に同文が見える。因って「入朝使に随つて、雲溟を渉るに利くして」に訓読を改む。海

を渡るのに便宜を得るの意。入朝使の記録は、その外の記録になく、『朝鮮史』第二編の（朝鮮総督府、昭和七年三月）の新羅憲安王二年の条には、『祖堂集』のこの箇所を記載す。

- (8) 元昌王后＝松岳郡は『新增東国輿地勝覽』卷三に開城府とする。『新羅本紀』卷一二の景明王の三年（九一九）に高麗の太祖は都を松岳郡（開城）に移したとある。（金富軾著金思權訳『完訳三国史記』上―二六七頁、六興出版）。『高麗史』第一（国書刊行会復刻本、原本、明治四一年一月）の「高麗世系」によれば、高麗の太祖神聖大王（八七七―九四三）の父は、世祖で威武大王という。『東国通鑑』卷一三によれば、父は金城大守王隆となる。母は威肅王后である。祖父は懿祖で景康大王であり、祖母が元昌王后となるのである。高麗の祖先の世系は不明な点が多いといわれているが、五冠山順之との関連はその点からも注目される。

- (9) 威武大王＝前注参照。

- (10) 四対八相＝五冠山順之の円相についての論文として、韓基斗「順之に於ける一円相思想」（『印仏研』第三〇巻第二号、一九八二年三月）および趙明基「新羅の順之と高麗の志謙の禅思想」（『中外日報』昭和五九年八月一日）がある。これらの論文についても、鄭性本博士に教えていただいた。記して感謝申し上げたい。

さて、『祖堂集』の影響について、従来、全くないと言う説があったが、柳田聖山編『祖堂集索引』下冊の「解題」（京都大学文学研究所、一九八四年二月）が示すように北宋の仏日契嵩（一〇〇七―一〇七二）等に引用があったことが確かめられた。

ところで、今、問題となるのが、高麗の静覚国師志謙（一一四五―一二二九）が編集した『宗門円相集』（暁城先生趙明基博士の所蔵本が『暁城先生八十頌寿、高麗仏籍集佚』で一九八五年五月に東国大学出版部より影印出版された）である。この著は松広寺の三世夢如が、貞祐七年（一二一九）に妙峯庵で跋文を書いて刊行したものである。『祖堂集』が高麗の高宗三二年（一二四五）に再彫大蔵経の補版として開版される二六年前に当るのである。この中に、「四対八相」「両対四相」「四対五相」が収録され、『祖堂集』とわずかな語句の異同を除いて長文が引用されている。『宗門円相集』の編者の華藏寺志謙は国師であり、その著は円相をはじめたのが南陽慧忠国師であって、朝鮮に円相が滄仰宗を通して正しく伝わったことを述べるにあるから、『宗門円相集』に占める滄仰宗の五冠山順之の位置は重要である。それでは、『宗門円相集』は「四対八相」「両対四相」「四対五相」の文をどこから引用したであろうか。『祖堂集』の基づいた五冠山順之の語録類からか、『祖堂集』そのものか。おそらく『祖堂集』によるのではないかと考えられる。延世大学校名誉教授の関泳珪博士も「祖堂集からの転写とも見られる」（『中外日報』昭和六一年一月三二日の『高麗仏籍集佚』解題）と述べられている。もしそうであるとすれば、朝鮮においても『祖堂集』は読まれていたことになる。

ここでは、朝鮮における滄仰宗の影響とその位置をみるために、『宗門円相集』の冒頭と跋文を参考に訓読を付して記載しておく。

とにする。

宗門円相集

伝法沙門志謙集録

滄仰宗派云、達磨第十世滄山靈祐禪師法嗣袁州仰山慧寂通智禪師、参忠国師、久為侍者。後造耽源之門。耽源謂仰山曰、国師当時伝得六代祖師円相共九十七箇、授与老僧。暨臨滅時、謂老僧曰、吾滅後三十年、南方有一沙弥、到来大興此法。次第伝授、無令断絶。我今付汝。汝当奉持。遂將其本過与仰山。山接得一覧、便将火烧却。耽源一日問、前来諸相、甚宜秘惜。山曰、当時看了、便烧却也。源曰、此法門無人能會。唯先師及諸祖師、諸大聖人、方可委悉。因何烧却。仰山曰、慧寂一覧、已知其意。但然用得、不可執本也。源曰、然雖如此、於子即得、後人信之不及。仰山曰、和尚若要、重録不難。即重集一本、呈上耽源、更無遺失。源曰、然。耽源上堂。仰山出衆作此○相、以手托呈了、却又手立。源以両手相交作拳示之。仰山進前三歩、作女人拜。源點頭。仰山便礼拜。

滄仰宗派に云う。達磨第十世滄山靈祐禪師の法嗣の袁州仰山慧寂通智禪師は、忠国師に参じて久しく侍者と為る。後に耽源の門に造る。耽源、仰山に謂いて曰く、「国師当時、六代祖師の円相、共に九十七箇を伝得して、老僧に授与す。滅する時に臨むに暨んで、老僧に謂いて曰く、吾が滅後三十年、南方に一沙弥有り、到来して大いに此の法を興こす。次第に伝授して、断絶せしむること無かれ。我今、汝に付す。汝当に奉持すべし。」遂に其の本を將ちて仰山に過与す。山、接得して一覧し、便ち火を將ちて烧却せり。耽源、一日問う、「前来の諸相、甚だ宜しく秘惜すべし。」山曰く、「当時看了りて便ち烧却せり。」源曰く、「此の法門は人の能く會する無し。唯だ先師及び諸祖師、諸大聖人のみ方めて委悉すべし。何に因りて烧却すや。」仰山曰く、「慧寂一覧して已に其の意を知れり。但然だ用い得れば、本に執すべからず。」源曰く、「此の如きと然雖も、子に於いて即ち得きも、後人の之に信じ及ばず。」仰山曰く、「和尚若し要せば、重ねて録するは難からず。」即ち重ねて一本を集めて、耽源に呈上するに、更に遺失無し。源曰く、「然り。」耽源、上堂す。仰山、衆を出でて此の○相を作り、手で以て托げ呈し了り、却に叉手して

『高麗仏籍集佚』六三〜六四頁

「滄仰宗派」とは、『人天眼目』卷四の滄仰宗の「円相因起」（『大正藏』卷四八—三二二頁下）と同様の内容である。仰山慧寂伝はすでに検討したが、ここではさらに南陽慧忠の侍者となったとする説が加上されている。以下には、南陽慧忠、馬祖道一およびその門下、滄仰などの円相示法が集められ、『宗門統要集』の引用が多く見られ、その後宋代の禅者の円相示法がまとめられている。

円相之作、始於南陽忠国師。実従上仏祖之命脈也。其旨趣幽玄宏妙、非智識所可擬議。学者皆溟滓然、莫有窺其涯涘者。况能発揚之乎。繇是南陽滄仰已後、尠有弘伝之者也。今王師華藏寺大禅翁、以独見之明、覷破先聖骨髓、禅寂之外、出一隻手、搜集諸家禅録中所著之相百七十則、鳩工鏤板、印施無窮。雷大法鼓、以演唱之。豈非大法之興其有所待焉耳。南陽・華藏是二大老、皆国師也。国師作之、国師繼之。可不謂希世之事耶。庸詎知昔之作者非華藏乎、今之繼者非南陽乎。然於中有箇諸師画不出、華藏収不尽底一相。具眼衲子、試請弁看。

立つ。源、両手を以て相い交えて拳を作り之に示す。仰山、進前すること三步して、女人の拝を作す。源、點頭す。仰山便ち礼拝す。

円相の作は、南陽忠国師より始まる。実に従上の仏祖の命脈なり。其の旨趣は幽玄宏妙にして、智識の擬議すべき所にあらず。学者は皆な溟滓然として、其の涯涘を窺う者有ること莫し。況んや能く之を発揚せんや。是れ繇り南陽・滄仰已後、之を弘伝する者有ること尠し。今、王師華藏寺大禅翁は、独見の明を以て、先聖の骨髓を覷破して、禅寂の外に、一隻手を出だし、諸家の禅録中に著す所の相百七十則を搜集し、工を鳩め板に鏤み、印施すること窮まり無し。大法鼓を雷し、以て之を演唱す。豈に大法の其の待つ所有るものを興こすことあらざらんや。南陽・華藏は是れ二大老にして、皆な国師なり。国師之を作し、国師之を繼ぐ。希世の事と謂わざるべけんや。庸詎昔の作者は華藏にあらず、今の繼者は南陽にあらざること知らんや。然も中に於いて箇の諸師の画き出さざる、華藏の収め尽さざる底の一相有り。具眼の衲子よ、巧みに請う弁じ看よ。

時貞祐七年己卯四月八日、妙峯庵夢如跋。

時に貞祐七年己卯（一一一九）四月八日、妙峯庵夢如跋

(同—一五七—一五八頁) —す。

(11) 龍樹〓この話は、『宝林伝』で創作され、その中に二度出てくる。この引用は「第十四龍樹菩薩章弁天戦品第十八」の方が語句が類似している(駒沢大学禅宗史研究会編「訳注『宝林伝』巻三—三〇—三二頁)。「景德伝燈録」巻一および道元の「仏性」にも引用がある。

(12) 経に云く…〓つづく次の引用とも北本『大般涅槃經』巻二七「師子吼菩薩品」(『大正蔵』巻二—五二五頁下。五二五頁下—五二六頁上)。南本『大般涅槃經』巻二五(同、七七〇頁中)。

(13) 故に遅し〓原文二「遅」字ナキモ、『宗門円相集』ニヨリ補ウ。

(14) 古人の〓章敬懷惲の法嗣の京兆大薦福寺弘弁。『景德伝燈録』巻九(『大正蔵』巻五—二二六九頁下)。

(15) 経に云く〓不明。

(16) 経〓不明。

(17) 経に云く〓『維摩詰所説経』「文殊師利問疾品第五」(『大正蔵』巻一四—五四五頁上)。

(18) 仏、阿難に告ぐ〓『首楞嚴經』巻四(『大正蔵』巻一九—一二二頁下)。(28)を(18)に改め、「十方如来の十二部経の清浄妙理を憶持すること、恒河沙の如しと雖復も」に訓読を訂正す。

(19) 志公笑いて云く〓『梁宝誌和尚大乘讚』十首(『景德伝燈録』巻二九所収)(『大正蔵』巻五一—四四九頁中参照)。

(20) 経に云く〓『首楞嚴經』巻六(前掲書—一三二頁上)

(21) 三祖云く〓『信心銘』「毫釐有差、天地懸隔」(『景德伝燈録』巻三〇所収)(『大正蔵』巻五一—四四九頁上参照)。なお、『人天眼目』巻四(『大正蔵』巻四八—三二二頁中)では、この四対五相を「五冠了悟和尚与仰山立玄問玄答」として載す。

(22) 経に云く〓六〇巻本『大方広仏華嚴經』巻八「初発心菩薩功德品」(『大正蔵』巻九—四四九頁下)。

(23) 古人の〓不明。

(24) 古人云く〓『新華嚴経論』巻八(『大正蔵』巻三六—七六八頁中)。

(25) 古人云く〓不明。

(26) 古人云く〓不明。

(27) 李通玄云く〓『新華嚴経論』巻三に「一切諸仏、皆依此二尊者、以為師範、而能成就大菩提之極果。或説普賢為長子、為建行成滿衆生故。或説文殊為小男、為盧遮創始発心証法身本智仏性之首」(『大正蔵』巻三六—七三九頁上)。「用仏文殊普賢三徳、互為主伴」(同

一七三九頁中)。「或説文殊普賢小男長子」(同)。(同―七四五頁上参照)とある。

(28) 經に云く〓六十卷『華嚴經』卷一四「兜率天宮菩薩雲集讚仏品」(『大正藏』卷九一四八五頁下)、同八十卷『華嚴經』卷二三(同卷一〇一―一二二頁下)。

(29) 經に云く〓『妙法蓮華經』卷六「如来寿量品第十六」我実成仏已来、無量無辺百千万億那由佗劫」(『大正藏』卷九一四二頁中)。

(30) 經に〓注(12)参照。

(31) 自性清淨円明の体〓法藏撰と伝える『修華嚴奥旨安尽還源觀』(『大正藏』卷四五―六三七頁上)の中心的主張の一つ。『首楞嚴經』卷一の「常住真心性淨明体」(『大正藏』卷一九―一〇六頁下)「無始菩提涅槃元清淨体」(同―一〇八頁下)。同卷二の「菩提妙淨明体」(同―一二二頁中)の〓とく、極めて実体に近い表現。

(32) 經に云く〓六十卷『華嚴經』卷八「十住品」に「有所聞法、即自開解、不由他悟」(『大正藏』卷九一四四五頁以下)とある。同八十卷『華嚴經』(同卷一〇一―八四頁中以下)。

(33) 古人云く〓『肇論』「般若無知論第三」聖人以無知之般若、照彼無相之真諦」(『大正藏』卷四五―一五三頁下)。

(34) 古人云く〓清涼澄觀撰『大方広仏華嚴經疏』卷一(『大正藏』卷三五―五〇五頁中)。

(35) 古人云く〓不明。

(36) 古人は〓不明。

(37) 古人云く〓不明。

(38) 大經に題して云く〓不明。

(39) 古人〓『大方広仏華嚴經論』卷二(『大正藏』卷三五―五〇九頁中下)参照。

(40) 古人云く〓不明。

(41) 古人〓不明。

(42) 〓是れなり〓該通仙人と智通隱士の二人を登場させて論を展開する例は、初期禪宗史の『絶觀論』の入理先生と縁門、『大乘開心顯性頓悟真宗論』の大照禪師と居士慧光などの構成を踏襲した点の共通性は興味深い。

(43) 了悟禪師真原の塔〓注(1)で示した様に、その出土地と五冠山瑞雲寺の關係をより一層検討する必要がある。なお、順之の没年は不明であるが、大中十二年(八五八)の入唐の時点を仮に二五歳とすると、太和八年(八三四)の生まれとなり、光化元年(八九八)に六五歳で示寂したことになろう。

(44) 五冠山順支〓 『伝燈録』は、五冠山を五観山に、順之を順支とする。

(45) 西來の意〓 達磨の中国へ来た意図を問うことは、禪宗の中心的な教えを問うことと同じである。その答えに松子を利用することは、馬祖以來の一つのパターンとなる。『景德伝燈録』卷六百丈懷海章(『大正藏』卷五一—二四九頁下) 参照。『宗門円相集』では、この問答につづいて、「僧作此〓〓〓相。師以手劃破、作此〇相答之」とあり、後の(10)の問答をつづける。

(46) 以の字も〓 護符の上に書く「六」の字は、「以」でもない「八」でもないの意。文字に形どれない真理を問うこと。

(47) 五花円相〓 注(45)に示すように、『宗門円相集』では、〓〓〓とするが、花にたとえるならば〓〓〓の文様であったかもしれない。順之は、円相の多用を破したものであろう。

七 仰山南塔光涌

(1) 宋齊邱撰「仰山光涌長老塔銘」(『全唐文』卷八七〇)

①夫衆生者、昼則共一明、夜則共一暗。明不爲之欠、暗不爲之分。蓋衆生同一智而共一見也。仏仏相授、祖祖密伝。以茲爲法実無法也。仰山心偈、天下泳之、正爲此也。然其化導大綱、祖教專用、伝襲源流、謂石亭仰山之宗。則涌公嗣其後也。

②公法号光涌、豊城県張氏也。誕生之夕、神光照庭。隣人以爲珠璧之祥。間而伺之、生男子也。七歳請学儒、詩書礼楽、若有素習。十三請学仏、経論禅智、悉如生知。一旦請遊方求

夫れ衆生とは、昼は則ち一明を共にし、夜は則ち一暗を共にす。明は欠くことを為さず、暗は分かつことを為さず。蓋し衆生は一智を同じくして、一見を共にするならん。仏仏相授け、祖祖密に伝う。茲を以て法は実に無法と為すなり。仰山の心偈、天下に泳ぐは、正に此を為すなり。然も其の化導の大綱は、祖と教とを専ら用い、源流を伝襲し、「石亭仰山の宗」と謂う⁽¹⁾。則ち涌公は其の後を嗣ぐなり。

公、法号は光涌⁽¹⁾、豊城県⁽³⁾の張氏なり。誕生の夕べ、神光、庭を照らす。隣人、珠璧の祥と以為い、間くして之を伺うに、男子生まれり。七歳にして儒を学ぶことを請うに、詩

師。父母器而從之。

③於時石亭之羶風、行四海。乃往礼之。石亭為之剃度。復就開元寺真公、伝浄名經密旨。十九詣襄州寿山寺戴公、受大戒。遂携餅錫、遍礼有德、以有間断意、契無間断心、以有生滅身、得無生滅体。石亭有似驢之問。涌公有非仏之対。石亭堂見諸方学人来便問、子来作麼。学人对曰、礼拝和尚来。石亭曰、還見和尚否。対曰、見。石亭曰、見和尚何似驢。学人無対。石亭將此語、每問折到学人、未有能対者。石亭乃問涌公云、子將作麼。対曰、礼拝和尚来。石亭曰、還見和尚否。対曰、見。石亭曰、見和尚何似驢。対曰、某甲見和尚、亦不似仏。石亭曰、既不似仏、似箇什麼。対曰、若更有所似、与驢何別。石亭曰、凡聖両忘、情尽体露。吾有此語来、近二十年、無人決了境。子大利根、当自保任。吾不能尽標、子異日可知而自行矣。嘗大奇之。謂之肉仏、可以化人矣。石亭帰寂。公燃第三指以報法、又燃第四指以報親。皆不群之事也。仍帰止於仰之棲隱寺、紹祖風也。

書礼樂は素習有るが若く、十三にして仏を学ぶことを請うに、經論禪智は悉く生知の如し。一旦、遊方して師を求むることを請う。父母、器んで之に従う。

時に石亭の羶風、四海に行なわる。乃ち往きて之を礼す。石亭、之が為に剃度す。復た開元寺の真公に就いて、『浄名經』の密旨を伝えらる。十九にして、襄州の寿山寺の戴公に詣り、大戒を受く。遂に餅錫を携えて、遍く有徳を礼し、間断有るの意を以て、間断無きの心に契い、生滅有るの身を以て、生滅無きの体を得たり。石亭、驢に似ぶるの問有りて、涌公、仏に非ざるの対え有り。石亭、堂に諸方の学人の来るを見るに便ち問う、「子、来りて作麼」。学人対えて曰く、「和尚を礼拝し来る」。石亭曰く、「還た和尚を見るや」。対えて曰く、「見る」。石亭曰く、「和尚を見て驢と何似ぞ」。学人対える無し。石亭、此の語を將て毎に問うて学人を折到するに、未だ能く對うる者有らず。石亭乃ち涌公に問うて云く、「子、將た作麼なるや」。対えて曰く、「和尚を礼拝し来る」。石亭曰く、「還た和尚を見るや」。対えて曰く、「見る」。石亭曰く、「和尚を見て驢と何似ぞ」。対えて曰く、「某甲、和尚を見るも亦た仏に似べず」。石亭曰く、「既に仏に似べず。箇の什麼にか似べん」。対えて曰く、「若し更に似べる所有らば、驢と何ぞ別ならん」。石亭曰く、「凡聖両ら忘じ、情

④洪帥南平鍾王、聞其名。若禪師家麟鳳、無有肩其威德者。遂遣使迎止於府下。使者至、師不起。於是州牧邑尹至、亦不起。已而士民皆來、又不起。乃共訴之曰、師如不起、貽郡県之咎。由是不得已、而後從之。既至、復館師於石亭、繼美名也。是時爲人說法、明色空一相、人仏同種。使士者捨書劍、農者棄耒耕、工者忘糾纏、賈者散金玉、万務失緒、官不能禁。師之教化、明白也如是。

⑤天祐十四年秋、還如旧隱。昇元二年夏、順化於禪寢。僧臘

尽きて体露(7)わる。吾れ此の語を有(8)ち来りて二十年に近きも、人の境を決了する無し。子、大いに利根なり、当に自ずから保任すべし。吾れ標し尽すこと能わず、子、異日に知りて自ら行ずべし。嘗て大いに之を奇として、「之れ肉仏(8)なり、以て人を化すべし」と謂う。石亭、寂に帰す。公、第三指を燃して以て法に報い、又た第四指を燃して以て親に報う。皆な群ならざる事なり。仍ち帰りて仰の棲隱寺に止まり、祖風を紹ぐなり。(11)

洪の帥の南平鍾王(12)、其の名を聞く。禪師家の麟鳳の若く、其の威徳に肩(13)る者有ること無し。遂に使を遣わして迎えて府下に止まらしむ。使者至るも、師起たず。是に於て州の牧、邑の尹至るも亦た起たず。已にして士民皆な来るも又た起たず。乃ち共に之に訴えて曰く、「師如し起たずんば、郡県の咎を貽(9)さん」。是に由りて已むを得ずして後に之に従う。既に至りて、復た師を石亭に館せしめ、美名を継(13)げり。是の時、為人說法は、色空一相にて、人仏同種なることを明らかにす。士者をして書劍を捨てさせしめ、農者をして耒耕(14)を棄てさせしめ、工者をして糾纏(15)を忘れさせしめ、賈者をして金玉を散ぜさせしめ、万務、緒を失ない、官、禁ずること能わず。師の教化、明白なること是の如し。

天祐十四年(九一七)の秋、還た旧隱に如く。昇元二年

七十、俗齡八十有九。門人具梵礼、塔於山之西南隅、表至德也。

⑥嗚呼涌公、王者固召不就。因慈悲而後就之、真天人也。將來者、多方求知、猶有弗獲。足見涌公不泯其能。蓋力救末法之弊爾。入室弟子彦新、執古之士也。任彼肉耳、聆余広誉、不遠千里、自袁而來、以行状授余請銘。殊不知人不勝名、文不勝德。然哀其誠慤、強而応之。其辞曰、

仏仏、乃真物。自迷誤、無得失。

曹溪歿、仰山出。曹溪髓、仰山骨。

曹溪虚、仰山実。仏兮涌、涌兮仏。

(2) 何が文殊の師か (以下『景德伝燈録』卷二二)

仰山南塔光涌禪師。僧問、文殊是七仏師、文殊有師否。師曰、遇縁即有。曰、如何是文殊師。師豎扠子示之。僧曰、莫遮箇是麼。師放下扠子叉手。

(九三八)の夏、⁽¹⁴⁾禪寝に順化する。僧臘七十、俗齡八十有九。門人、梵礼を具し、山の西南隅に塔し、⁽¹⁵⁾至徳を表わすなり。

嗚呼、涌公、王者固く召すも就かず。慈悲に因りて後に之に就くは、真の天人なり。將に來らんとする者、多方に知を求むるも、猶お獲ざる⁽¹⁶⁾こと有るがごとし。涌公の其の能を⁽¹⁷⁾泯さざるを足見す。蓋し力めて末法の弊を救うものならん。入室の弟子彦新は、執古の士なり。彼の肉耳の余の広誉を聆くに任せて、千里を遠しとせずして袁より來り、行状を以て余に授けて銘を請う。殊に知らず、人、名に勝えず、文、徳に勝えざることを。然れども其の誠慤を哀んで、強いて之に応ず。

其の辞に曰く、

仏仏、乃ち真の物。自ら迷誤して、得失無し。

曹溪歿し、仰山出づ。曹溪の髓、仰山の骨。

曹溪虚にして、仰山実なり。仏が涌や、涌が仏や。

仰山南塔光涌禪師。僧問う、「文殊は是れ七仏の師⁽¹⁸⁾なり、文殊に師有りや。」師曰く、「縁に遇わば即ち有り。」曰く、「如何なるか是れ文殊の師。」師、扠子を豎てて之に示す。僧曰く、「遮箇は是なること莫しや。」師、扠子を放下して叉手

す。⁽¹⁹⁾

(3) 何が見事な働きを示した言葉か

問、如何是妙用一句。師曰、水到渠成。

問う、「如何なるか是れ妙用の一句。」師曰く、「水到れば渠成る。⁽²⁰⁾」

(4) 真仏はどこに住んでいるか

問、真仏住在何処。師曰、言下無相、也不在別処。

問う、「真仏、何の処いずれに住すや。」師曰く、「言下に無相(21)なれば、也た別処いずれに在あらず。」

(1) 石亭仰山の宗宗石亭は、慧寂の活躍した洪州の石亭観音院をさす。仰山慧寂の注(6) 参照。ここに瀧仰宗の名より先に仰山慧寂の集団が独自の活躍をしていた事が認められていた点は注目に値しよう。

(2) 光涌光涌 (八五〇—九三八)。覚範徳洪撰『禅林僧宝伝』巻八に、南塔光涌禅師の伝記がある。宋齐邱の塔銘に基づきながらその事を述べない。

①禅師名光湧。予章豊城章氏子。母乳之夕、神光照庭、厩馬皆驚。因以光湧名之。七歳誦詩礼、晓大義。十三学经论、輒能讲解。开元寺有尊宿、史忘其名、有异能解。见湧嘆曰、法中俊人也。以维摩经旨决授之。

禅師、光湧と名づく。予章豊城の章氏の子なり。母、之を乳むの夕、神光、庭を照らし、厩馬皆な驚ろく。因つて光湧を以て之を名づく。七歳にして詩礼を誦して、大義を晓らむ。十三にして経論を学び、輒ち能く讲解す。开元寺に尊宿有り、史に其の名を忘ず、異能の解有り。湧を見て嘆じて曰く、「法中の俊人なり。」『維摩経』の旨決を以て之に授く。

②時仰山寂禅師、住南昌之石亭寺。湧父事之、得度。十九詣襄州寿山寺戴律師、受满分戒。北游謁臨济。臨济曰、汝師明眼、乃不事之、遠游何為。湧因南帰、執勤累歳。先是石亭見

時に仰山寂禅師、南昌の石亭寺に住す。湧、之に父事し、得度す。十九にして襄州の寿山寺の戴律師に詣り、满分戒を受く。北游して臨济に謁す。臨济曰く、「汝が師は明眼なる

来参者、必問曰、来作麼。曰、礼覲和尚。又問、還見和尚麼。曰、見。又問、和尚何似驢。参者無能对。脱对亦不契。忽問湧、湧对曰、光湧見和尚、亦不似仏。石亭曰、若不似仏、似箇什麼。湧曰、若更有所似、与驢何別。石亭大驚曰、凡聖兩忘、情尽体露。吾以此語驗人、已二十年、無決了者。噫、子真利根。当自保任。吾不能尽、子異日当自知耳。指以謂人曰、此子肉仏、可以化人也。石亭歿。湧然第三指以報法、又然第二指以報親。

③偽唐天祐元年、南昌帥南平王鍾伝、尽礼迎至府。使至不起。於是州牧県尹至、不起。道俗頓集、亦不起。乃共訴之曰、師不起、貽郡県之咎。於是不得已從之。遂嗣石亭法席。学者帰之如雲。

に、乃ち之に事えずして、遠く遊ぶは何が為ぞ。」湧、因みに南に帰り、執勤して歳を累ぬ。是れより先、石亭、来参の者を見れば、必ず問うて曰く、「来りて作麼。」曰く、「和尚を礼覲す。」又た問う、「還た和尚を見るや。」曰く、「見る。」又た問う、「和尚は驢と何似ぞ。」参ずる者、能く对うる無し。脱し対うるも亦た契わず。忽ち湧に問う、湧对えて曰く、「光湧、和尚を見るも亦た仏に似べず。」石亭曰く、「若し更に似ぶる所有らば、驢と何ぞ別ならん。」石亭、大いに驚きて曰く、「凡聖兩ら忘じ、情尽きて体露わる。吾れ此の語を以て人を驗すこと、已に二十年になるも、決了の者無し。噫、子は真の利根なり。当に自ら保任すべし。吾れ尽すこと能わず、子、異日に当に自ずから知るべし。」指以て人に謂いて曰く、「此の子肉仏なり、以て人を化すべし。」石亭歿す。湧、第三指を然して以て法に報い、又た第二指を然して以て親に報ゆ。

偽唐天祐元年（九〇四）、南昌の帥の南平王鍾伝、礼を尽くして迎えて府に至らしむ。使至るも起たず。是に於て、州牧、県尹の至るも起たず。道俗の頓に集るも亦た起たず。乃ち共に之に訴えて曰く、「師起たずんば、郡県の咎を貽さん。」是に於て、已むことを得ず、之に従う。遂に石亭の法

④十四年秋、還仰山。偽唐昇元二年夏、無疾而化。閱世八十有九。坐七十夏。(『統藏經』卷一三七—二三八頁右上下)

席を嗣ぐ。學者、之に帰すこと雲の如し。

十四年(九一七)の秋、仰山に還る。偽唐昇元二年(九三八)の夏、疾無くして化す。閱世、八十有九、坐七十夏。

臨濟義玄に会ったことを、『禅林僧宝伝』は新たに記すが、義玄の示寂が咸通七年(八六六)とすれば、出合いは不可能であり、臨濟側の要請で生まれた話であろう。

(3) 豊城県 〓『大明一統志』卷四九の江西の南昌府の条に、豊城県は府城城南一百六十里に在り、と記す。

(4) 開元寺の真公 〓不明。開元寺は、馬祖の活躍した所。『大明一統志』に、永寧寺は府城内に在り。旧、能仁上藍禅院と名づく。唐の馬祖禅師は、梁の葛鰲の宅を以て建つ、と記すが、開元寺をさす。『新建県志』卷三〇参照。

(5) 襄州の寿山寺の戴公 〓不明。襄州は湖北省襄陽県。注(2)の『統藏經』の『禅林僧宝伝』が戴を載に作るは誤植。

(6) 驢に似ぶるの問 〓黄龍の三関の機関に近い。『禅林僧宝伝』卷二二の「黄龍南禅師」の伝に「以仏手・驢脚・生縁三語、問學者、莫能契其旨。天下叢林、目為三関」(『統藏經』卷一三七—二六四頁右下)とあり、『建中靖国統燈録』卷七の「黄龍慧南」の章に「師室中常問僧出家所以、郷関来歴。復扣云、人人尽有生縁处。那箇是上座生縁处。又復当機問答、正馳鋒弁、却復伸手云、我手何似仏手。又問諸方參請宗師所得、却復垂脚云、我脚何似驢脚。三十余年、示此三問。往往學者、多不湊機、叢林共目為三関」(同卷一三六—三五八頁左上)とある。

(7) 凡聖兩ら忘じ 〓仰山慧寂が二十年近い説法の中で、日常の学人指導に使用していた語であるとする記事は、注目に価する。元来、滄山靈祐の語とする点は、仰山慧寂の(3)項、注(33)、(4)項参照。

(8) 肉仏 〓生きた仏の意。『景德伝燈録』卷五に慧能を「肉身菩薩」と呼んでいる。(『大正藏』卷五—二三五頁下)。

(9) 石亭、寂に帰す 〓慧寂の示寂地は、既に仰山慧寂の(33)項、(74)項で示すように、韶州東平山弘祖禅院である。光涌が慧寂の示寂の時点でどこに居たか、この塔銘の文では明らかではないが、仰山棲隱寺でないことだけは後文から確かである。仰山に帰ったのが、石亭観音院からか、東平山弘祖禅院からかは、どちらにも推測可能である。ただ、慧寂の示寂と次の文のつづきからすると、慧寂の示寂の場所に居あわせたと私は理解したい。このことは、慧寂の注(95)に述べたように、滄仰宗における「仰山」の場所の位置づけともからみ大事である。

(10) 第三指を然して 〓仰山慧寂が出家の時に指を燃やすことは、(2)項にあり、注(21)(22)にも触れた。ここでは、慧寂の示寂に

対して報恩行として行なわれた点が注目される。つまり、仰山慧寂を開祖とする強い集団形成の要素が見られるからである。一九九〇年九月九日、広東省乳源の雲門寺を参観した。いただいた雲門寺の資料の「乳源文史資料第七輯雲門山大覚禪寺（專輯）」（一九八八年十月）の住持伝源大和尚の伝によると、「一九五二年二月十九日、在大殿燃左無名指供仏、以報父母師長之恩。」とあって焼指が現在でも行われていると言うことをあとで知ったが、その伝統について質問する機会は逸してしまった。

(11) 仍ち帰りに注(9)で推測したように考えられるとすれば、『祖堂集』の仰山慧寂章の(33)項にある「東平に遷化し、仰山に帰える」とは、慧寂の仰山の帰葬であり、光涌がそのことと深くかかわっていることを示すことになろう。

(12) 南平鍾伝(？—九〇六)については、石井修道『宋代禅宗史の研究』(大東出版社、一九八七年一〇月)一九七頁以下参照。光涌が鍾伝に迎えられた場所は石亭院であるが、慧寂の示寂後に帰っていた仰山棲隱寺から迎えられている。仰山に建てられた陸希声の「仰山通智大師塔銘」が出来たのが、乾寧二年(八九五)三月一日であるから、光涌が石亭院に迎えられたのは、それ以降と考えられ、鍾伝の三〇余年に及ぶ江西支配の晩年のことになろう。ただ、鍾伝が没して後も、光涌は石亭院に留まっていたのであり、仰山に天祐四年(九一七)に帰るまでの約二〇年の活躍となる。洪州での活躍は、仰山の宗風の拡張に大きな影響を与えたと考えられる。

(13) 人仏同種なること馬祖禅の特色である即心是仏の継承で、衆生と仏とが一体であることを述べたもの。

(14) 昇元二年光涌がこの示寂の年まで仰山において活躍していたことは、仰山の集団を考える場合重要である。『宗門十規論』において、法眼文益が五家を最初に分類したと伝えられるが、法眼が撫州曹山に住持したと考えられる九二四年から九二八年までの間に、仰山で活躍していたのは、外ならぬ光涌であったからである。法眼の眼に映じた滄仰宗の実体は、仰山光涌を中心とする活躍であって、このことが法眼の五家の一つに分類される直接の原因となったものである。石井修道「滄仰宗と曹洞宗」(『宗学研究』第二九号、一九八七年三月)、同『宋代禅宗史の研究』(前掲書)二〇五頁参照。

(15) 山の西南隅に塔し光涌は南塔と呼ばれるが、それは南に塔が建てられたからであろう。因みに光涌は、仰山の二世ではない。西塔光穆が第二世と言われ、光穆の塔は西に建てられたのであろう。東塔と呼ばれる人もいて、伝記等は不詳であるが、光涌が天祐十四年に仰山に帰ったのは、あるいは西塔光穆か、東塔の示寂によるのかもしれない。

(16) 彦新不明。仰山の法嗣で法系が栄えるのは、西塔光穆と南塔光涌だけであり、この二人の法孫が滄仰宗のすべてとなる。

(17) 袁より江西省袁州のことで、仰山を具体的にはさす。

(18) 文殊は是れ七仏の師七仏は過去七仏の意。この語は百丈懷海が創唱したと言われる。『天聖広燈録』卷九(『統藏経』卷一三五—三三八頁右下)。

(19) 松子を放下ニ五冠山順之の注(45) 参照。

(20) 水到れば渠成るニ水が流れて行けば、みぞが自然に出来るように、釈尊の徳が自然に衆生に及ぶこと。

(21) 真仏ニ『臨濟録』に「真仏無形、真法無相」(入矢訳注岩波文庫本一八九頁)とある。

八 仰山東塔和尚

(1) 何が君王の剣か(『景德伝燈録』卷一二)

仰山東塔和尚。僧問、如何是君王劍。師曰、落纜不采功。僧曰、用者如何。師曰、不落時人手。

仰山東塔和尚⁽¹⁾。僧問う、「如何なるか是れ君王の剣。」師曰く、「落纜して、功を采らず。」僧曰く、「用いる者は如何。」師曰く、「時人の手に落ちず。」

(2) 法王と君王の出会いとは

問、法王与君王、相見時如何。師曰、兩掌無私。曰、見後如何。師曰、中間絶像。

問う、「法王と君王と相見する時は如何。」師曰く、「兩掌、私無し。」曰く、「見えて後は如何。」師曰く、「中間に像を絶す。」

(1) 仰山東塔和尚ニ不詳。南塔光涌の注(15)に示したように、仰山の發展に尽した人であることは間違いないが、詳しいことは判らな

九 洪州観音常鐺⁽¹⁾ (以下『景德伝燈録』卷一二の目録に名のみある人)

(1) 洪州観音常鐺ニ不詳。洪州観音については、仰山慧寂の注(6)参照。慧寂の後に石亭観音院を継いだ一人。

十 福州東禪慧茂⁽¹⁾

(1) 福州東禪慧茂 不詳。福州東禪寺は、閩県の晋安西郷易俗里にあり。『三山志』卷三三に「東禪院は易俗里にあり。大同五年（五三九）、州人鄭昭勇、宅を捐てて之を為す。白馬上に在り。旧。浄土と名づく。唐武宗、廢して白馬廟と為す。咸通十年（八六九）、郡人、僧惠筏^{すゐ}を迎えて之に居せしむ。夜の禪定に及びて、戎服の拝して辞する若き者有り。是の夕、或るもの白駒の東に之^まくを見る。觀察使李景温、祠を撤するに因りて寺と為し、東禪浄二^{じやう}と号す。錢氏、東禪応聖と号す。」とあり、慧茂と慧筏は同一人と考えられる。東禪寺は北宋の官版大藏經の出版で有名である。椎名宏雄「宋代福州版大藏經の刊行と禪宗」（『宗学研究』卷二八号、一九八六年三月）参照。

十一 福州明月山道崇⁽¹⁾

(1) 福州明月山道崇 不詳。

十二 処州遂昌⁽¹⁾

(1) 処州遂昌 不詳。処州は浙江省麗水県の東南にあり。

十三 忠州日巖山月光寺大通

(1) 忠州月光寺円朗禪師大宝禪光塔碑（『朝鮮金石総覧』卷上）

①□□□□□江府月巖山月光寺詔諡円朗禪師大宝禪光靈塔碑并序

朝請郎守錦城郡太守賜緋魚袋臣金顙奉教撰

五騰山菩提潭寺釈迦沙門淳蒙奉教書

②□□□□□之君、垂礼楽於百代、猶龍之帝、敷道德於万方。莫不崇仁重義、允文允武、好生惡殺、乃儉乃慈。若迺掃跡玄妙之郷、安寂自然之域、了因果而双□、□□思而並除。静為踪□、□□□□。喻人間若大夢、齊衆生猶如来。理寄忘言、事超物外。其惟我禪師之宗乎。

③禪師諱大通、字太融、朴姓。寄家通化府仲停里。歴代捨官爵之榮、近親紹朴素之□。顯祖王考□□□□□氏族本取城郡人也。妊禪師日、守節持齋、誦經胎教。及其載誕、果異常倫。禪師蘊河嶽之英靈、稟乾坤之秀氣、猶崑山之片玉、寔桂林之一枝。將邁鰲年、爰登冠歲。家□□□□□勉旃於翰墨之場、耽翫於經史之域、汝其志哉。禪師乃恭受其旨、忽焉尋師。聰睿則五行具下、敏捷乃一覽無遺。遍通諸子百家、洞□千經万論。後窺内典、益悟群□。□□□□□是非不異。

□□□□□江府月巖山月光寺の円朗禪師大宝禪光靈塔と詔諡せる碑並びに序⁽¹⁾

朝請郎・守錦城郡太守・賜緋魚袋の臣、金顙⁽²⁾教を奉じて撰す。

五騰山菩提潭寺釈迦沙門淳蒙⁽³⁾教を奉じて書す。

□□□□□の君、礼楽を百代に垂れ、猶龍の帝、道德を万方に敷けり。仁を崇び義を重んずること、允文允武にして、生を好み殺を悪むこと、乃儉乃慈ならざるなし。若迺⁽⁴⁾掃跡を玄妙の郷に掃い、寂を自然の域に安んずれば、因果を了じて双……、思を……して並⁽⁵⁾な除く。静を踪……と為し、……人間に喩うれば大夢の若く、衆生を齊⁽⁶⁾うこと猶お如来のごとし。理は忘言に寄せ、事は物外に超ゆ。其れ惟⁽⁷⁾れ我が禪師の宗ならんや。

禪師、諱は大通、字は太融、朴が姓なり。家を通化府⁽⁴⁾の仲停里に寄す。歴代は官爵の榮を捨て、近親は朴素の□を紹ぐ。顯祖王考……：氏族本と取城郡⁽⁵⁾の人なり。禪師を妊む日、節を守り齋を持し、經を誦して胎教す。其の載誕に及ぶに、果たして常倫と異なる。禪師、河嶽の英靈を蘊⁽⁶⁾み、乾坤の秀氣を稟⁽⁷⁾くること、猶お崑山の片玉のごとく、寔に桂林の一枝なり。將に鰲年⁽⁸⁾を邁⁽⁹⁾ぎんとし、爰⁽¹⁰⁾に冠歲に登る。家……翰墨の場を勉旃し、經史の域を耽翫するは、汝、其の志ならんや。」禪師乃ち其の旨を恭受し、忽焉として師を尋ぬ。

④遂投簪落髮、解褐披緇。以会昌乙丑年春、投大德聖鱗、進具戒僧。□配居丹巖寺。□是修心戒律、練志菩提。忍辱精進為先、布施恭敏為次。時為師子吼、□□□□□□忘年請交、迴席相事時也。師兄慈忍禪師、自唐歸國。師時造謁忍禪師、察其雅懷、知非所教。乃設馬羈之義、激揚龍象之心。師即潛□憤悱、欲扣玄微。爰抵織山、寓□□□□、□乃神僧元曉成道之所也。習定三月、後依広宗大師。大師見知、令惣寺務。辞不獲已、因而莅焉。未幾功就曰、吾当捨去。

⑤以大中丙子歲、投入唐賀正□□□□□□華夏、遍詣宗林、乃至仰山、師事澄虚大師。大師預察聰惠、俯令精心、教諭真宗、夙夜無倦。師素概超倫、丹誠罕足。智踰離日、識邁弥天。□涉炎涼、默受黃梅之印。不經□□□□□□之珠。後乃巡礼名山、歴參禪伯。

聰睿なれば則ち五行具に下り、敏捷なれば乃ち一覽して遺す無し。遍く諸子百家に通じ、洞かに千経万論に□す。後に内典を窺い、益ます群□を悟る。……是非異ならず。

遂に簪を投じて髮を落とし、褐を解いて緇を披る。会昌乙丑の年（八四五）の春を以て、大德聖鱗に投じて、具戒僧に進む。□配して丹巖寺に居す。□是心を戒律に修め、志を菩提に練る。忍辱精進を先と為し、布施恭敏を次と為す。時に師子吼を為し、……年を忘れ、交を請い、席を迴して相事うる時なり。師兄の慈忍禪師、唐より歸國す。師、時に造りて忍禪師に謁し、其の雅懷を察し、教ゆる所にあらざるを知る。乃ち馬羈の義を設け、龍象の心を激揚す。師、即ち潜かに憤悱を□し、玄微を扣かんと欲す。爰に織山に抵り、……に寓す。□乃ち神僧元曉の成道の所なり。習定すること三月、後に広宗大師に依る。大師、見知して、寺務を惣べらしむ。辞、已むことを獲ず、因りて馬に莅む。未だ幾くならずして功就して曰く、「吾れ当に捨て去るべし。」

大中丙子の歲（八五六）を以て、入唐賀正に投じて……華夏：遍く宗林に詣り、乃ち仰山に至り、澄虚大師に師事す。大師、預め聰惠を察し、俯して精心ならしめ、教ゆるに真宗を諭すに、夙夜倦むこと無し。師、素概は倫を超え、丹誠は足くこと罕なり。智は離日を踰え、識は弥天を邁ぐるな

⑥既周中夏、欲化東溟。咸通七年、投迴易使陳良付足東來時、乃波濤騰湧、煙靄昏沈、舟楫有傾覆之虞。僧俗□□溺之患、師乃略無懼。□□□□不易去国之麻衣、匪換出家之壯志。若非神通妙用、智識遐周、履險不驚、孰能至此。広宗大師、聞師東還、遣使邀請。異礼相接。□愛良多來。年春出山、寓止□□□夏夜□月嶽神官來請。及曉慈忍禪師致書云、月光寺者、神僧道証所創也。昔我太宗大王、痛黔黎之塗□、□□海之□□。□戈三韓之年、垂衣一統之日、被□□□之□、永除□□之災、別封此山、表元勲也。曾授録於金剛、又伝名於仙記。清冷泉澗、靄靄煙霞、広孕殊靈、備存□伝。師其居焉。師如響応声、振衣即□□□夕夢前神侍衛□□□□□行致礼、肘步瞻容曰、先有叨陳、勞遠相応。師是以養形茲地、寄居此山。顕示玄機、揄揚法要。不存善惡、若疾風之帰雲、解脱是非、□□□之突圉。由是檀越將踰境□、□□□□□。既至宝山之人、罕聞索手之士。羶行普彰、香名遠着。価高六合、誉及九重。景文大王、以弘長養之深仁、慘空寂之釈典。遠聆禪徳、思豎良□。□□□□□、□月五日、遣觀栄法師、遠費金、詔慰勞。山門隸月光寺、永令禪師住持。又一年再迴天睽、重降綸言、追錫恩波、遐宣眷渥。茶□

り。□…炎涼に涉り、黙して黄梅の印を受く。…経ずして…の珠を…後に乃ち名山を巡礼し、禪伯を歴参す。

既に中夏を周くし、東溟を化せんと欲す。咸通七年(八六六)、迴易使陳良に投じて、東來に付足する時、乃ち波濤騰湧し、煙靄昏沈して、舟楫の傾覆の虞有り。僧俗…溺の患も、師は乃ち略懼れ無し。…去国の麻衣を易えず、出家の壯志を換うるにあらず。若し神通妙用にして、智識遐かに周く、履險の驚かざるにあらざれば、孰か能く此に至らんや。広宗大師は、師の東還するを聞き、使を遣わして邀請し、異礼もて相い接す。…良に多來を愛ず。年春に山を出で…に寓止す。…夏の夜…月嶽神官來請す…。曉に及び慈忍禪師、書を致して云く、「月光寺は神僧道証(13)の創る所なり。昔、我が太宗大王は、黔黎の塗…を痛み、…海の…。戈を…三韓の年、衣を垂れて一統の日、…の…を被り、永く…の炎を除く。別に此の山を封じ、元勲を表わすなり。」曾て録を金剛に授け、又た名を仙記に伝う。清冷たる泉澗、靄靄たる煙霞、広く殊靈を孕み、備く…伝を存す。師其れ焉に居す。師、響の声に応ずるが如く、衣を振いて即…、…夕、前神の侍衛するを夢む。…行…礼を致し、肘步瞻容して曰く、「先に叨陳有れば、勞遠相い応ず。」師是を以て、形を茲の地に養い、此の山に寄居す。玄機を顕示し、法要を

□□、□□□来、世論為榮、禪門增輝。

⑦中和三禪仲夏、群蛇出穴、遍谷盈山、咤口悲号、垂頭泣血。禪師謂門人曰、生也有涯、吾豈無尽。汝等当無墮怠勉力修行。以其年十月五日、儼□□□□年六十有八。僧臆三十九。

⑧嗚呼、歿而不歿、名播三韓。亡而不亡、法流千載。於是煙雲索漠、松檜蒼匯、遠近僧徒、高卑士女、覩變□而叩地、銜悲傷以号天。接武致哀、拊膺長□、□□□□。淚集成泉。門人融奐等、以其年二月十日、奉遷神柩、葬于北院。永訣慈顏、不勝感慕。門人等慮陵遷谷徙天弘海田、有忘先師法乳之

揄揚す。善惡を存せざることを、疾風の雲に帰するが若く、是非を解脱すること、……の罅を突くが……。是れより檀越、將に境……を踰えんとし、……。既に宝山の人に至り、素手の土を聞くこと罕なり。羶行普く彰れ、香名遠く着く。価、六合より高く、誉、九重に及ぶ。景文大王、以て長養の深仁を弘め、空寂の釈典を慘む。遠く禅徳を聆き、思を良……に豎つ。……月五日、觀榮法師をして遠く金を費らしめ、慰勞を詔ります。山門、月光寺に隸して永く禅師をして住持せしむ。又た一年して再び天睭を迴らし、重ねて綸言を降し、恩波を追錫し、眷渥を遐宣す。茶……来……世論榮と為し、禅門、輝きを増す。

中和三禪（八八三）の仲夏、群蛇、穴を出で、谷に遍し山に盈つ、咤口悲号し、頭を垂れて泣血す。禪師、門人に謂いて曰く、「生も涯り有り、吾れ豈に尽きること無からんや。汝等当に墮怠無く、修行に勉力すべし。」其の年の十月五日を以て、儼……年六十有八、僧臆三十九なり。

嗚呼、歿して歿せず。名は三韓に播く。亡じて亡ぜず。法は千載に流る。是に於て煙雲索漠し、松檜蒼匯す。遠近の僧徒、高卑の士女、變□を覩て地を叩き、悲傷を衝きて天に号す。武を接し哀を致し、膺を拊し……長……淚集まりて泉を成す。門人融奐等、其の年の二月十日を以て、神柩を奉遷

恩、欲以仰陳攀慈之志。爰集行狀、□□□□□□居請建鴻碑、用光聖代。□□□□□英文聖武、繼祖嗣凶。凡於内教之中、尤深依仰之意。聞亡悲怛、不自勝任。仍追謚円朗禪師、塔号大宝光禪。又詔微臣修撰碑讚。臣功踈画虎、用匪懷蛟。叨奉□□□□□□。

⑨其詞曰、

□□□□□沙、達摩兮伝心中華。
散滿兮山盈谷溢、周流兮地角天涯。
円通兮無形無相、任用兮非実非花。
強字兮玄珠法印、強名兮迦葉盧遮。
朝鮮兮東接扶桑、昔賢兮称茲福□。
□□□□□月光、清高兮僧為人瑞。
是非兮了之不存、聖智兮弃之不義。
貪瞋兮捨而不捨、声色兮利而不利。
神靈兮感化囀繞、皇王兮念道崇師。
嘉猷兮無疆莫極、懿績□□□□□。
□□兮鬱然成市、学徒兮豈或多歧。

し、北院に葬る。永く慈顔と訣れ、感慕に勝えず。門人等しく陵の谷を遷し天に徙り海田を払うを慮り、先師の法乳の恩を忘るる有りて、以て攀慈の志を仰陳せんと欲す。爰に行狀を集め……居…請して鴻碑を建て、用て聖代を光かせんとす。……英文聖武にして、祖を継ぎ凶を嗣ぐ。凡そ内教の中に於て、尤も依仰の意に深し。亡ざるを聞きて悲怛し、自ずから任に勝えず。乃ち円朗禪師と追謚し、塔を大宝光禪と号す。又た微臣に詔して碑讚を修撰せしむ。臣、功の虎を画くに踈く、用の蛟を懷うにあらず。叨りに奉……。

其の詞に曰く、

……沙…、達摩や心を中華に伝う。
散滿するや山に盈ち谷に溢つ、周流するや地角り天涯る。
円通なるや形無く相無し、任用なるや実にあらず花にあらず。
強いて字するや玄珠の法印、強いて名づくるや迦葉の盧遮なり。
朝鮮や東は扶桑に接し、昔賢や茲を福□と称す。
……月光…、清高なるや僧は人の瑞と為る。
是非や之を了して存せず、聖智や之を弃てて義ならず。
貪瞋や捨てて捨てず、声色や利して利せず。
神靈や感化して囀繞す、皇王や道を念じ師を崇ぶ。

六賊兮去而不去、方法兮知而不知。
皇□兮何辜何戾、青丘兮孰福孰祐。
哲人兮倏然委化、禪林兮忽焉衰朽。
祇園兮慘慘□□、□□□□□□秀。
嗚呼哀哉法梁折、勒石銘金示諸有。

⑩龍紀二年歲次庚戌九月十五日建。

門下僧真胤等刻字。

(1) 月巖山…月光大通(八一六—八八三)は、『祖堂集』や『景德伝燈録』では仰山慧寂の法嗣に数えることはないが、後文に示すように、その法嗣と見なしてよいと思われるのでここに記載した。『朝鮮金石総覧』巻上によると、「碑身の高さ七尺四寸、幅三尺二寸。字径七分、楷書の題額は泐滅す」とあり、所在は「忠清北道堤川郡寒水面東倉里の月光寺址」であり、年時は真聖王四年庚戌(八九〇)に建てられたものである。

(2) 金額 不詳。

(3) 淳蒙 不詳。

(4) 通化府 遼寧省新賓県の東。

(5) 取城郡 黄海道黄州牧(『東国輿地勝覧』卷四一)。

(6) 聖鱗 不詳。

(7) 丹巖寺 不明。

(8) 慈忍…『朝鮮金石志』巻上の「越寧興寧寺澄大師宝印塔碑」の折中(八二六—九〇〇)の伝によると、慈忍に出合ったことを伝え

瀧仰宗の盛衰(石井)

嘉猷や無疆にして極まること莫し、懿績や……

…や鬱然として市を成し、学徒や豈に多岐に或らんや。

六賊や去りて去らず、方法や知りて知らず。

皇□や何ぞ辜せん何ぞ戾せん、青丘や孰か福せん孰か祐せん。

哲人や倏然として委化し、禪林や忽焉として衰朽す。

祇園や慘慘として…、…、…秀…。

嗚呼、哀しき哉。法梁折る。石に勒し金に銘して諸有に示す。

龍紀二年、歳庚戌に次る(八九〇)の九月十五日建つ。

門下僧真胤⁽¹⁵⁾等字を刻す。

ている。

(9) 元暁 元暁の基本的資料は、『朝鮮金石総覧』巻上の「慶州高仙寺誓幢和上塔碑」で、一九一四年五月、慶尚北道慶州市内東面暗谷里止淵より発見された。この寺は不明。

(10) 広宗大師 不詳。

(11) 澄虚大師 仰山慧寂。慧寂は会昌元年(八四一)の三五歳のときに仰山に住し、大中一三年(八五九)に石亭観音院に移った可能性がある。慧寂の仰山住持期間を知る資料となろう。

(12) 陳良 、『朝鮮史』第二篇三〇五頁に、この年の記事を、この碑銘より記載す。

(13) 道証 法相宗の円測の門人で、入唐したことがある。

(14) 融奐 不詳。

(15) 真胤 不詳。

(つづく)

(一九九〇・七・一九)